

博物館の資料保存と調査研究

～北海道開拓記念館の一例～

北川 芳 男

博物館の仕事はひとくちについて 資料の収集 保存 調査研究 展示および教育普及の諸活動である。これらのうち 後2者が いわば博物館の表の顔であり 前3者は裏方の仕事なのである。北海道開拓記念館の表の顔 とくに展示については 小村さんの詳しい紹介があるので ここでは裏方の仕事に焦点を当ててみよう。

程度で時間と手間のかかるのは「仕分」の段階であろう。当館では「開拓記念館資料分類表」にもとづき 資料は 総集 記録 地史 生物 考古 民族 生活 産業 文書 美術の 10 分野に分類され 1点ごとに資料記録票（カード式）に記載される。

分類表は資料の特性および検索を考慮して作成される

1 資料の保存と管理

博物館 資料館の重要な役割は いうまでもなく それぞれの目的に応じて収集した各種の資料を永久的に保存し 研究や普及のために利用されるよう整備しておくことである。この仕事は博物館や資料館におけるもっとも重要で かつ基本的なことであるにもかかわらず 正直にいうと わが国の博物館でこの仕事が理想的になされているところはないようである。それには種々の原因が考えられるが 研究分野別になされる資料管理のシステムにもその一因があるように思われる。担当研究者が不在であるので 資料がどこにあるかわからないという返答がよく返ってくる。これでは博物館や資料館としての役割は果せないのである。開拓記念館ではこのような弊害をのぞくため 館資料の一括管理を行っている。収集された資料は表-1に示した過程で収蔵庫へ収納され 一括管理されることとなる。この過

表-1 資料受入手順

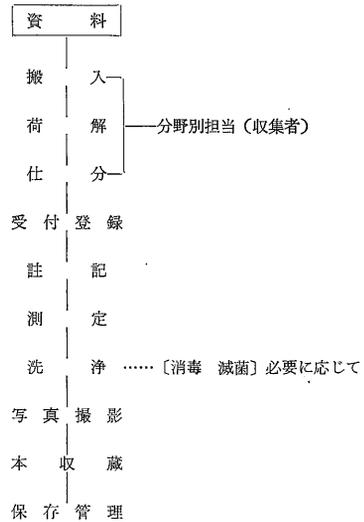


表-2 地史部門の分類表 (中分類まで)

2000 地 学		00	10	20	30	40	50	60	70	80	90
000	総 集										
100	堆積岩		砕屑物 (礫質)	砕屑物 (砂質)	砕屑物 (泥質)	火山砕屑物	化学的沈澱物	生物源沈澱物	炭 質	アスファルト	質
200	火成岩		深成岩	半深成岩	噴出岩						
300	変成岩		広域変成作用 (泥質岩)	広域変成作用 (塩基性岩)	接触変成作用 (泥質岩)	接触変成作用 (塩基性岩)	接触変成作用 (炭酸塩岩)	変形作用			
400	鉱 物		元素鉱物	硫化鉱物	ハロゲン化 物	酸化鉱物	炭酸塩鉱物	珪酸塩鉱物	磷酸塩鉱物	硝酸塩鉱物	
500	粘土鉱物		パイロフィ ライト鉱物	雲母族鉱物	緑泥石族鉱物	バーミキュラ イト族鉱物	モンモリロナ イト族鉱物	カオリン鉱物	蛇紋石 族	シリカ セピオ ライト 鉱物	
600	土 壤		ポドゾル性土	褐色森林土	赤 色 土 黄 色 土 (古赤色土 も含む)	黒ぼく土	泥 沢 土	沖 積 土	水田土壌 (水稲土)		
700	動物化石		有孔虫 腔腸動物	棘皮動物 軟体動物	節足動物	魚類 両生類 は虫類	鳥 類	哺乳類 化石人類			
800	植物化石		葉状植物	藻菌 類	コケ植物 (蘚苔類)	シダ植物	種子植物 (顕花植物)	裸子植物	被子植物		
900	その他		天文資料 (隕石 隕鉄 など)	気象資料	海洋資料	地震資料					

㊦ 開拓記念館の資料分類は4桁の10進法を採用している この表は中分類まで この下位に細分類の段階がある

地学資料記録票

学 科	採集地	採 集 日	採 集 者
種 名	標 本 号	採 集 地 名	採 集 地 座 標
学 科 記 号	採 集 年 度	採 集 時 代	採 集 地 地 質
写 真		採 集 地 地 図	採 集 地 地 質 図
採 集 地 地 質 図	採 集 地 地 図	採 集 地 地 質 図	採 集 地 地 図

図1-A 地学資料記録票表面

採 集 地	採 集 日	採 集 者
採 集 地 名	採 集 地 座 標	採 集 地 地 質
採 集 地 地 図	採 集 地 地 質 図	採 集 地 地 質 図

図1-B 地学資料記録票裏面

べきものではあるが 残念ながら現在のところわが国で統一されたものはない。参考までに当館の地史分野の分類表を 表-2 に示しておく。

資料記録票は それぞれの資料の特性 形状 由来 所在などがすべてわかるように記載される。したがって 記録票の完成には 資料の研究が十分なされなくてはならないし 逆に 記録票も完備していないような資料は 真の意味での博物館資料とはいえない。当館では記録票を資料カード室で一括管理し 該当資料の情報が何時でも提供できるようになっている。こうした資料分類・整理の仕事は「……資料目録」という形式で公開されるわけである。これでわかるように「資料目録」も 本来 目にみえない日常の調査・研究が総括されたものでなければならないのである。ただ 目新しい研究論文だけがチャホヤされ「資料目録」など単なるパンフに過ぎない という風潮があるかぎり 本格的な博物館は生れてこないのではないだろうか。

資料の保存が博物館の伝統的使命であるのに対し その積極的な公開と情報の提供は博物館の近代的使命であるといえよう。当館ではそのために カード検索機とマイクロフィッシュの撮影機を導入し 資料情報提供へのシステム化を計っている。検索カードにもりこまれる情報は それぞれの館 資料の性格によって異なるであろうが われわれのところでは13項目(分類番号 記録票番号 受入方法 受入年度 氏名 住所 時代 地域 材質 一括資料 収蔵場所 収蔵番号 他館)を選定している。検索カードの情報をより細くうめるためにも資料記録票の充実が必要となることはいうまでもない。

ところで 資料保存・管理上でいま一つ重要なことは

資料の保存環境を如何にするかという問題である。博物館・資料館が建設される場合 まず展示室の大きさ デザインなどは非常に力を入れるが 資料を収蔵する場所のことは 往々にして おざなりになりがちである。多くの場合 収蔵庫面積が圧倒的に小さいか 設備が不十分である。

開拓記念館では収蔵施設として次のようなものがある(図-3 4 5)。

- ① 作業コーナー(126.00m²) 図-3 に示すように 一般収蔵庫に連絡する部分にあたり 搬入された資料は ここで登録 写真撮影 計測などの調査がなされる。
- ② 1号一般収蔵庫(485.10m²) 据置型で 産業 生活資料のうち大型のものが 木製およびスチール製棚に納められている。
- ③ 2号一般収蔵庫(919.80m²) 積層型で3層よりなり 比較的小型の資料がスチール製棚と抽出棚に 分類表にもとずき整理され収納されている。上層は生活 民族 中層は産業 下層が地史 生物 考古資料となっている。また本庫には電動式資料運搬用昇降機が設備されている。



図2 マイクロフィルム撮影室
導入機器類 正面 マイクロフィッシュ
左側 ジョブフィルムプリンター

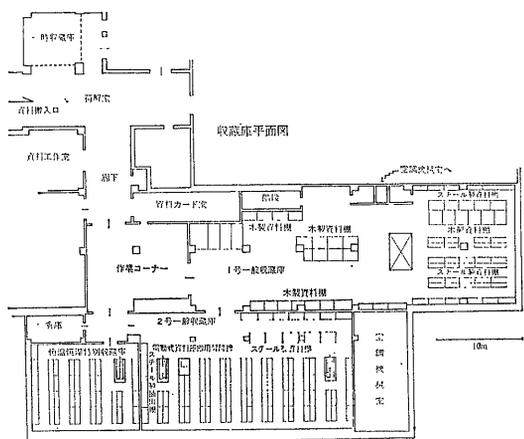


図3 収蔵庫平面図

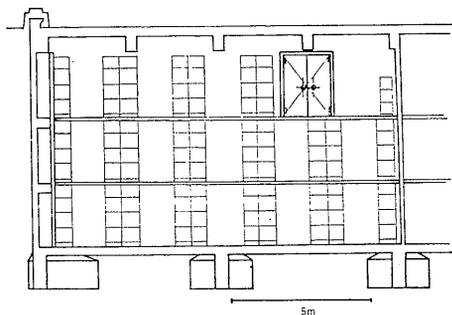


図4 恒温恒湿特別収蔵庫断面図 縮尺1/100

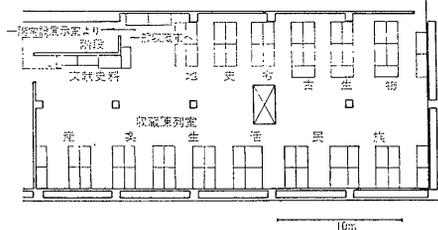


図5 収蔵陳列室平面図 縮尺1/200

- ④ 恒温恒湿収蔵庫 (415.80m²) 2号収蔵庫と同様積層型3層で 紙製品 布製品 漆器類などが収納されている。
- ⑤ このほか 収蔵と展示をかねた収蔵陳列室(422.10m²)が一般に公開されている。

これらの収蔵庫の環境条件は機械調整され 恒温恒湿収蔵庫が 通年 22±1°C 湿度 60±3% その他収蔵庫は 夏季25±1°C 冬季 22±1°C 湿度は通年 60±5% となっている。しかし このような機械空調は全面的には信用ならず つねに チェックが必要である。

資料を保存するためには 単に収蔵施設がととのっているだけでは不十分である。なぜなら 資料はそれが置かれた場所において 常に何んらかの外的影響を受け時とともに消耗し 傷んでいく。もちろん 資料の材質の差異 あるいは収集(採集)されたときの状態によって その傷み方もちがってくる。そこで それに対する措置や対策が問題となり 保存科学あるいは技術の

必要性がでてくるのである。しかし 残念ながらわが国の博物館においては これに対する取組が全く立ちおくれしている。博物館独自で この分野の調査・研究を進めているところはまずないといってよい。開拓記念館では十分とはいえないが この分野に係る研究員を2名配置し 基礎的な問題から具体的な対策や技術の開発をめざして 手をつけはじめている。現在 具体的な問題としては館内の環境とものとの関係 木製品と虫害 金属の腐蝕とその防止などがある。走査型電顕やソフテックスなどの機器も そのために導入したもののなのである。実は保存の科学は 広義の風化の問題であり 物理 化学 生物学的な問題が包含され その基礎データは種々の面で応用される可能性もあると考えられ もっと この分野の研究が進むことを期待したいのである。



図6 1号一般収蔵庫のスチール製棚と手動式ホークリフト

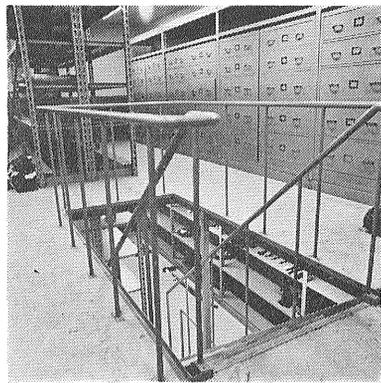


図7 2号一般収蔵庫(積層型)内のスチール製抽出棚

2 調査研究活動

博物館が生き生きした活動の場であるための原動力として 調査研究活動がある。博物館の調査研究の基本は資料の徹底的な分類と記載の仕事である。それによって出されたデータが 端的に記録票に集約されることになる。それゆえ 開拓記念館における各部門の日常のテーマ（個人テーマと読み変えてもよい）は 資料の収集 保存と結びついたものが選定される。また 館有資料の系統的な調査研究を主とするテーマもある。こうした基本的テーマとは別に 館全体として取組む大きなテーマ（いわば総合研究）をも進めている。その一つは“野幌丘陵の自然と歴史”をテーマとし 自然科学と人文科学の両面からアプローチし 同時に地域性を加味したユニークなものである。他の一つは“伝統的生産技術の歴史”を 館有資料の系統的な研究から解明しようとするものである。これらの調査研究課題は5カ年計画で進められるが いずれにしても 分類と記載を基礎として その地域の特性と歴史的解明を行ない 現在の問題にも発言できるように努力しているのである。

最後に 博物館の特殊性というか 調査研究機関とのちがいというかはしらないが 調査研究活動における最終段階 つまり成果の発表の形式についてふれておく。大学や調査・研究機関では その成果は研究論文として学術誌に発表する。たまたま 普及という立場で せいぜい普及解説書的なものをまとめるだけである。ところが 博物館における研究の発表の場は 展示という方法が加えられる。当館では常設展示室 収蔵陳列室のほかに特別展示室（500m²）があり 年2～3回の特別展示を開催する。われわれはこの特別展示を 原則として館で行なった調査研究の成果の発表の場と考え その企画を行なっている。昨年度（1974）は「縄文文化」展と「炭鉱」展を行なったが 両者とも3年間にわ

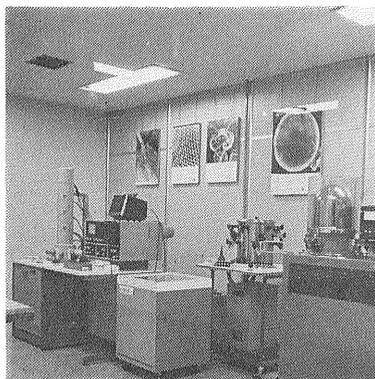


図8 走査型電顕室 この部屋は外部廊下よりガラス窓を通して見えるようになっており 顕微鏡像をビデオにして一般に見せている 研究用ばかりではなく 普及活動にも利用していることに注目してもらいたい

たる調査研究の成果に立脚したものである。

展示を通して 研究成果を公開するという事は 論文や解説書を書くより むずかしいものである。シナリオの作成 展示資料の検討 展示のレイアウト デザイン パネルの作成 展示目録の作成など 一連の仕事をそのテーマの担当グループがおこなう。こんなわけで学術的な調査研究とは別に 展示技術に関する調査研究もまた館の重要な研究分野なのである。

たしかに 自分たちの研究成果を展示として発表することは骨の折れることであり また 金のかかることでもある。それで普通は めずらしい資料や他所での企画を持ちこみ 特別展として客寄せすることが多いようである。これでは何時までたっても 研究と普及は統一されないし 新しい形の博物館は生れてこない。

こんなわけで 博物館は単なる社会教育機関でもなければ研究機関でもない。いわば研究と教育が統一された機関でなければならないのである。この辺のニュアンスが 残念ながらよく理解されないようである。

（筆者は 北海道開拓記念館学芸部長）

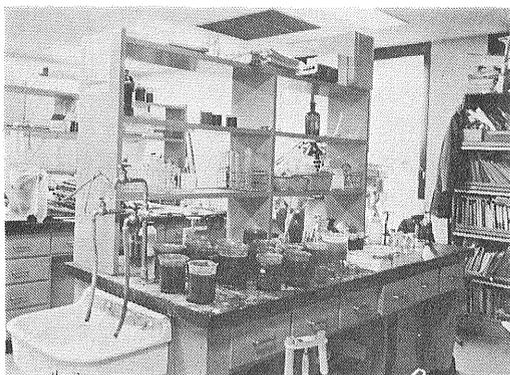


図9 保存科学のための化学分析室



図10 第12回特別展「炭鉱」「ヤマ」の移りかわり このような特別展はすべて研究職員の手で作られる